

ピアノガイダンス Report

平成26年12月7日(日) 本学にて、ピアノガイダンスが行われました！

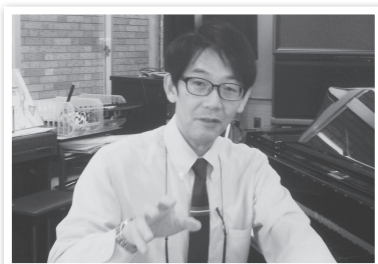
試験・レッスンを担当する教員が、“聖徳ピアノ”をマスターするためのポイントを直接指導。

当日は、大学・短期大学部の学生20名程の方が参加し、熱心に耳を傾けていました。

<プログラム>

第一部 13:30～14:30 初心者のために
～音楽表現への第一歩～

第二部 14:30～15:30 「音楽実技Ⅰ」及び
「音楽Ⅰ」課題曲のポイント解説
～アドバンストゥ エチュード、
マーチ、幼児とともに～



ご担当いただいた 武藤 純一先生

きちんと音の高さや音色が調整されたピアノは、自分で音の高さを作らなければならないヴァイオリンなどと違って、鍵盤をたたけばそれなりの音は出せます。しかし、音符を読んで音の高さ、長さ通りに鍵盤をたたけば“音楽”になる、というわけではありません。少し難しいですが、弾き手は音楽を表現するために楽譜に書かれた情報からさまざまな音楽感覚を心や頭の中で並行処理しているのです。拍節感やフレーズ感といった音楽感覚、音階やアルペジオなどの運動技術は、子どものうたやマーチを弾くのとモーツァルトやショパンなどの名曲を弾くのと基本的な部分では何ら違いはなく、音楽表現をするためのとても大事な音楽要素なのです。

それでは、ガイダンスで説明したピアノを弾く時に意識するさまざまな音楽要素から一部をご紹介します。

【初心者編】バイエルの学習で大事な意識



音楽要素の内、全ての基本になるのが「打鍵」です。ピアノを発音させる文字通り鍵盤を打つという動き。良い打鍵を身につけられれば、歌わせることも、リズム表現も、フレーズをまとめる事も思うようになります。そしてもう一つ、打鍵に欠かせない大事な感覚が「脱力」です。脱力は、ピアノの音、音色に関わるとても大切な感覚です。動きや感覚に関する事は、実際にピアノを使って説明する方が分かりやすいのですが、次のキーワードは意識しておくといいでしょう。「音を響かせるように打つ」「つかむ」「指先に腕の重さを伝える」「鍵盤を押さえつけない」「手首や腕、肘の解放」です。

打鍵の基本とともに大切な要素が「レガート」です。レガートは“なめらかに音をつなげる”という意味で、特にメロディーを歌わせる時に使う奏法です。まずは練習する際、自分の音を聴いてみましょう。そしてどのように音がつながっているかを聴き分けます。指先にかかっている重心を次の指に移す時、なめらかな動きで行いましょう。歩行をイメージするのも良いと思います。音から音へすっきりと移るのではなく、音と音を少しにじませながら移ります。この適度な“にじみ”がレガート奏のポイントです。この時も打鍵後脱力することを忘れないでください。「重心のなめらかな移動」「歩行のイメージ」「適度ににじみ」がキーワードになります。打鍵は感覚的に一人ではなかなか分かりにくいので、できればレッスンを受けながら身につけられることをお勧めします。

最後に、“読譜”に欠かせない「拍節感」、拍を感じる感覚です。これは、新しい曲を読んでいく際に“ものさし”になる、リズムを理解する上でとても大事な感覚です。書かれている音が何拍目に当たるのかを見極めながら楽譜を読んでいきましょう。そしてメロディーの流れがつかめたら、今度は拍が等間隔になるように練習します。テンポ設定にも気をつけましょう。拍節が取りにくい時にはメトロノームを使うことをお勧めします。



今回は楽譜を読んで、練習する際の一番基本的なところを紹介しました。残念ながら、最近試験でリズムなどの読譜ミスをしている学生を少なからず見かけます。正しい読譜は音楽表現への最初のステップです。そのためにも今回紹介した「拍節」は特に意識してください。



受講者アンケートより
(一部抜粋)

課題曲をスムーズに合格していきたいですが、試験の教室内の雰囲気には圧迫されます。スクーリング「音楽理論Ⅰ」の前に今日のガイダンスに参加してよかったです。3年次の早い段階で参加すればよかったと後悔しました。

楽譜を見ながらだと弾けるのに、暗譜がほとんどできません。試験になると緊張して、練習の時出来ていたことが出来なくなります。分散和音が苦手で、音がつぶれるし、リズムが崩れてしまうこともあります。本日はありがとうございました!!練習時、参考にしながら頑張って弾きたいと思います。

ピアノガイダンスはなるべく出席できるようにしていますが、難しくなればなるほど基礎が大切で、今また忘れていたことを思い出させていただきました。ピアノに向かってイスの座り方、姿勢、打つ、脱力、音の響きなど、一本は指を独立させて弾くなど今後に生かしていきたいです。

個人の音楽教室でレッスンを受けていますが、やはりその曲ごとのポイントなど初めてお聞きすることが多かったため、今後は本学のレッスンと併行していきたいと思いました。

